

課題
宿命

ウサギ小屋

藤田千恵子

人物

北原明日香
(29)

田中麻実
(10)
明日香の生徒

田中聖子
(42)
麻実の母親

竹下和美
(43)
保健指導員

男子A

○ 明星小学校 4 年 3 組 教室

黒板の左端に、白墨で書かれた大きい「学活」という文字の隣に「家族について」という文字が並んでいる。北原明日香⁽²⁹⁾が黒板を指さし、生徒たちの前ではっきりした声で話している。

明日香「・・・だから、こういう家族を将来持ちたいでもいいのよ。読んだ本の感想だつて構わないし。とにかく家族にまつわることなら何でも OK。原稿用紙 2 枚くらいにまとめて・・・」

男子 A 「先生、そんなにたくさん書くことないっす」

教室中ががやがやし出す。え、まじ？無理い、・・・と言った文句の言葉が聞こえてくる。

×××

明日香が教壇の椅子に座って、赤鉛筆で採点をしている様子。生徒たちの鉛筆のかりかりという音が教室全体に響

いている。明日香が顔をあげて生徒達を見回す。集中して鉛筆を動かしている子もいれば、天井を見上げてぼーっとしている子もいる。窓際の4列目に座っている田中麻実(10)が、じっと原稿用紙を見つめている。明日香が立ち上がり、生徒達の間を縫って歩く。麻実の横に立つ。原稿用紙には何も書かれていない。明日香が時計を確かめる。

明日香「あと10分しかないわよ。うまく書こうなんて思わなくていいのよ。感じたままを文にしてみて」

麻実が明日香を見上げる。明日香が麻実を見て、微笑む。麻実が鉛筆を動かす。

○ 明星小学校・職員室・放課後

明日香が机の上に原稿用紙を広げ、読んでいる。途中クスツと笑いながら読み続けている。軽くうんうんうなづき

ながら、原稿用紙を裏返し、隣に置く。
新たに顔を出した原稿用紙には、
「絵本の中のおかあさん」という題名
の下に、田中麻実 という名前がある。
作文を読む明日香の横顔。途中顔を上
げ、神妙な面持ちになる。

○明星小学校・廊下・放課後

明日香が紙袋を小脇に抱えて廊下を歩
いている。

麻実の声（作文の内容）「おかあさんが居て
くれると嬉しいけど、私はおかあさんが隣
にいるのにとてもさみしいです。どうして
かというと、おかあさんは時々絵本の中に
入ってしまうからです。絵本の中にはお母
さんの敵がたくさんいます。ばあちゃんは
おかあさんを病院に連れて行こうとします。
おかあさんはいやがってすごいきんかにな
ります。『麻実ちゃん』と言って、につこ
りするお母さんが私は大好きです。いつも

そういうお母さんでいてくれたらいいな」

明日香が保健室の前で立ち止まる。

○明星小学校・保健室（夕）

竹下和美(43) が明日香と向かい合い、椅子に座っている。手の上の原稿用紙を読んでいる様子。その姿を、明日香が落ち着かない様子で見ている。和美が顔を上げる。

和美「これだけじゃ何ともねえ・・・」

明日香「坂巻先生が・・・あつ田中さんの去年の担任ね。行事にはいつもおばあちゃんが出てきたから、お母さんには会ったことないって。あと、数人の女の子たちが田中さんを仲間外れにしている、注意したことがあったって言ってました」

和美「もうすぐ家庭訪問よね。お母さんに会ってみることが先決ね。おばあちゃんにも話を聞いて・・・もちろん田中さんにも」

明日香が決心したようにうなづく。

○ 明星小学校校庭・ウサギ小屋（夕）

ウサギ小屋の中で麻実が掃除をしている。ゴミをひとつにまとめ、ふう、と一息つく。数匹のウサギを一匹ずつ順番に手の上に載せ、優しくなでてにっこりとほほ笑みかける麻実。人の足音が近づいてくる。明日香が現れ、ウサギ小屋を覗き込む。

明日香 「あれ？田中さん？今日はウサギ当番飯塚さんじゃなかったっけ？」

麻実が明日香の言葉にはっと驚いた後、困ったようにもじもじしている。

明日香 「もう五時よ。今までずっと掃除してたの？」

麻実 「掃除もしたけど・・・うさぎが好きで遊んでたから。飯塚さん用があるって言って私うさぎ好きだから当番代わったんです」

明日香 「そう・・・田中さんは優しいね。うさぎもとっても気持ちよさそうにしてる」

麻実が下を向いて恥ずかしそうにする。

明日香「でももう遅いから帰りましょ。ゴミは先生が明日朝に捨てておくから」

○学校からの帰宅路（夕）

明日香と麻実が並んで歩いている。

明日香「次の当番は、飯塚さんにやってもらうのよ」

麻実「でも・・・」

明日香「交代するってそういうことなのよ、ね」

麻実「はい・・・」

明日香「田中さんの作文、読んだよ」

麻実がチラッと明日香を見上げる。

明日香「お母さんに会うことできるかな」

麻実「えっ？今日？今日は無理。だって今ば

あちちゃん、検査入院でいないんです」

明日香「先生はお母さんに会いたいのよ。おばあちちゃんともゆっくりお話したいけど」

下をむく麻実の頬に大粒の涙がこぼれる。

麻実「先生・・・あのね・・・あのね、お母さん
ね・・・」

麻実が泣きじゃくる。明日香が麻実の
頭を優しくなでる。

明日香「先生、お母さんとお話してみるから。
大丈夫だから・・・」

麻実がヒックヒックと泣いている。

○ 田中家・玄関（夕）

明日香が玄関に立ち、周りをぐるりと
見回す。床には、色々なものが雑然と
置かれている。靴箱の上には埃が被っ
ている。麻実が靴を脱ぎながら鼻をく
んくんさせる。麻実の表情がぱっと明
るくなり、明日香の方に振り返る。

麻実「ホットケーキだ！お母さんホットケ
ーキ作ってる。先生ちよっと待ってて。お母
さん連れてくる」

×××

田中聖子(42) が麻実に手を引かれて玄

関に現れる。聖子の前髪が、自分で切ったのか、パツンと急な斜めになっている。着ている物は、花柄のブラウスにチェツクのスカート。

明日香「初めまして。麻実さんの担任の北原明日香です。ウサギ当番で帰りが遅くなつてしまつて申し訳ありません」

聖子「いつも麻実がお世話になってます」

麻実「先生上がつて上がつて。一緒にホットケーキ食べようよ」

明日香「え、でも・・・」

明日香が聖子をチラリと見る。

聖子「よかつたらどうぞ」

明日香「じゃお言葉に甘えて・・・」

麻実が聖子の手から離れて、今度は明日香の手を引っ張る。

○ 田中家居間（夕）

麻実と明日香がホットケーキを食べている。聖子がホットケーキが載ったお

皿をお盆に載せて台所から現れる。

聖子「おかわりどうですか？まだたくさんありますから」

明日香「ありがとうございます。とつてもおいしいです」

麻実が、ホットケーキの一切れをフォークに挿したまま、聖子と明日香を交互に見てニコニコしている。麻実がホットケーキを頬張る。

麻実「お母さん、おいしい！とつてもおいしい。ね先生。美味しいでしょ？お母さんのホットケーキ」

明日香「うん。おいしいね」

その時ふと聖子の表情が変わる。

聖子「ねえ麻実、そうよ北の部屋の壺がなくなっただでしょ？苺がいっぱい入ってて、ふたするとつぶれちゃうのよ。三角の帽子を被った男が持ってたから・・悪者と闘うって。あの角のセブンイレブンに潜んでる。奥の奥のトイレの奥に。ね困るでしょ？困

「ったわあ」

明日香が呆然とする。麻実が明日香を
気にしながら、まくしたてる。

麻実「お母さん！ホットケーキおいしいよ。
甘くてふわふわで。お母さん、私めちやく
ちや嬉しいんだから。先生も美味しいって
言ってくれて・・・お母さんも一緒に食べ
よ。壺なんてどうでもいい。壺なんて私知
らない・・・」

聖子の表情がキツと険しくなる。

聖子「正しいこと？誰が保障できるの？どん
どん広がっていくんだから。海みたいに。
クラプトンは生まれ変わったの」

下を向いていた麻実が明日香の方をす
がるようなまなざしで見つめる。明日
香がゆっくりと手を伸ばし、麻実の手
を力強く握る。

○ 明星小学校 4 年 3 組教室

北原明日香(29) が泥のついたランドセルを持ち上げて見せる。生徒たちが妙な表情で押し黙っている。

明日香「田中麻実さんのランドセルがなくなつたので探していたら、体育館の裏から出てきました・・・」

クラスがざわつき、田中麻実(10) に視線が集まる。麻実が暗い表情で、斜め下方を見ている。

明日香「ランドセルは足がないから勝手にそんなところ行かないよね。誰か知りませんか？」

首を横に振る女子生徒。「知りませうん」と高らかに言う男子生徒。隣同志でヒソヒソ声で話す子達もいる。

明日香「意地悪だったら、こんな悲しいことはないです。麻実さんだけじゃなくて・・・こんなことするその本人も悲しくて可哀そうだと私は思います・・・」

堀越紀子(10) が手を挙げる。明日香が
紀子の発言を促す。

明日香「はい、堀越さん・・・」

紀子「先生・・・悪いこととした人が可哀そうなら
んておかしいです」

明日香「そうか・・・そう思うよね。じゃあね、
みんな楽しいなって思う時とむしゃくしゃ
する時とどっちが意地悪になりやすいと思
う？」

生徒たちが口々に「むしゃくしゃする
時・・・」と答える。

明日香「でしょ？・・・先生はね、意地悪する
人は自分がむしゃくしゃしたりイライラし
たりしてるんだと思うの。そのイライラを
人にぶつけてるのねきっと・・・。だから本
人も可哀そうって言ったのよ」

前列の生徒たちが納得したような表情
でうなづいている。

明日香「お勉強も大事だけれど、自分が穏や
かな気持ちでいられる方法を見つけること

も大事だと思う。みんなひとりひとり、それ探してみて。それが今日の宿題。そして言いたいことがある人・・・何でもいいわよ。言いに来て。じゃ今日はこれで終わり。あ、田中さん、先生と一緒にランドセルきれいにしよう。ピカピカにしちゃいませよ」

麻実がのっそりと席を立ち、明日香の方へと歩く。

紀子が掃除道具入れから新しめの雑巾を持ってきて明日香に渡す。

明日香「ありがとう。堀越さん」

明日香が雑巾でランドセルを拭き始める。それを見ている麻実と紀子の二人に数人の女子が加わる。

女子生徒 A 「・・・きれいになりそうだね。

よかったね、田中さん」

麻実が「うん」と言っただけにかみ顔でうなづく。

窓際の後方の席で帰り支度をしている三橋里佳子(10) が明日香たちの方を冷

たいまなざしでちらりと見る。

×××

明日香がランドセルの点検をしている。

明日香「うん、いいみたいね。汚れてるところないかな。みんなありがとね。気をつけて帰ってね」

紀子と5く6人の女子が「じゃ、さようなら・・・」と言って教室を出ていく。明日香が麻実の背中にランドセルを背負わせる。

明日香「ウサギ当番の時はランドセル、先生に預けて」

麻実がうなづく。

明日香「二度と起こってほしくない・・・こんなこと。ね・・・」

明日香が麻実のランドセルを軽く叩く。

○明星小学校・校庭にあるウサギ小屋

明日香と麻実がウサギ小屋の掃除をしている。

明日香「今日は誰の代わり？」

麻実「三橋さん・・ピアノがあるって・・」

明日香「そんな風に代わってあげてばかりじ

やだめよ。先生明日みんなに言うから・・」

麻実「あたし、ウサギ好きだから・・」

明日香「それはよくわかってるけど・・お当

番は一人ひとりが責任持たなきゃね・・」

麻実「はい・・」

明日香がごみ袋をまとめ、振り返りざ

まに言う。

明日香「あれからお母さんの具合はどう？

いつものお母さんだった？それとも絵本の

中にいるお母さん？」

麻実が下をむいてしばらく黙っている。

顔をあげ、決心したように話し出す。

麻実「お母さんね、膝を誰かに蹴られて痛い

って言ってる。おばあちゃんが、誰も蹴って

ないでしょって言うのと、ひどいって泣いて

物投げるの。おばあちゃん、今青いのよ、

おでこのここ・・」

そう言って麻実が自分のおでこの右側を触る。

明日香「そうかあ・・・。先生、来週くらいに田中さんのお家に行ってもいい？おばあちゃんともお話してみたいから。お母さん、絵本の中にいるときは病気なのかもしれないの。お母さんが悪いんじゃないやなくてその病気のせいなのよ、きっと・・・」

麻実が明日香を見上げる。

麻実「そしたらお母さん治るの？」

明日香が両手を麻実の両肩に置く。

明日香「大丈夫。きちんとお医者さんにかかれば治るから」

麻実の表情が明るくなる。

○明星小学校・4年3組教室（朝）

がやがやとしている教室内。

明日香が現れ、教壇に立つ。

明日香「はい、みんな席について」
生徒たちが席に着き始める。

明日香が空席の机を見る。

明日香「あら？今日は田中さんお休み？誰か連絡受けてない？」

首を横に振る生徒たち。

○ 田中家・ダイニング（夕方）

半分ほどお茶が残った湯呑に急須からお茶が継ぎ足される。湯呑の前に明日香が座っている。その向かいに麻実が無表情で座っている。

明日香「ありがとうございます」

田中静子(66)が急須をテーブルに置きながら麻実の隣に座る。静子のおでこに青あざが痛々しい。

明日香「そうですか・・・それは大変でしたね」

静子「今日はいつもより暴れたもんですから連絡しそこないました。ご心配かけて申し訳ありません・・・こんなこと他人様に知られたくなかったのですが、もうどうしていいやら・・・」

明日香「お昼寝はいつも長いんですか？」

静子が時計を見る。

静子「いつもは一時間半くらいで起きるんですけど。今日はもう2時間過ぎてます。たぶん聖子は体力使いはたして疲れたんでしよう」

明日香がお茶を一口すする。一呼吸おいて、

明日香「家の外に麻実ちゃんを狙う悪いヤツがいるっていうのは事実というよりも聖子さんの妄想ということになるのでしょうか」

静子「間違いないです。宇宙人が侵入するか泥棒が自分の財布を狙っているとかしよつちゅう言うって騒いでます」

明日香「私が調べた限り、聖子さんの症状は統合失調症に似通っています。もしそうであれば、早く治療すればするほど早い回復が期待できます・・・だから・・・」

静子が深い溜息をひとつつく。

静子「暴れるんですよ・・・医者に連れて行こ

うとすると。おかしいのはあんだだ・・と
すごい勢いでなじられます。一度は庖丁を
持ち出したこともあります。お恥ずかしい
話です」

麻実の表情がこわばる。明日香がト―
トバッグからクリアファイルを引き抜
き、書類を静子の前に並べる。

明日香「大変な思いをされてきたんですね。
お察しします・・今の聖子さんの状況は、
おばあ様がひとりで抱えられる問題ではな
いと思います。専門家の介入、もしくは専
門家に全面的に託すことが必要だと思いま
す。市役所、病院、公的機関などの相談窓
口がここにあります。市役所の医療精神相
談窓口や麻実さんのことも心配なので児童
相談所などにお話しを聞いてもらいましょ
う。私もできる限りお供します」

静子が指で涙をぬぐう。

静子「誰にも相談できなかつたんです・・あ
の娘を殺して自分も死のうと・・何度も」

静子が嗚咽する。

麻実が静子にしがみつく。

麻実「おばあちゃん、泣かないで・・・」

明日香「麻実ちゃん、お母さんのおかしな行動は病気がそうさせてるのよ。みんなで助け合ってお母さんの病気をなおしましょうね」

そこに田中聖子(42) がのっそり現れる。セーターを数枚重ね着して動きづらそうな様子。額には多量の汗が流れている。

聖子「麻実、隠れなさい！ピストルを持った男があんたをつけまわしてる！すぐそこにほら、近づいてくるからっ！」

聖子が麻実の腕をつかむ。

麻実が静子にしがみつく。明日香が立ち上がる。

明日香「その男ならゴジラが食べちゃったわ」
聖子「えっ？そうなの？」

聖子ぽかんとして麻実を離す。

○市役所内（夕）

暗い階段を上る北原明日香⁽²⁹⁾の後ろを田中静子⁽⁶⁶⁾が付いていく。途中明日香が後ろの静子を気にして立ちどまる。

明日香「田中さん、ゆっくりでいいですよ」

静子「はい、すみません」

二人が階段を再び上がる。

○市役所3階（夕）

明日香がカウンターの向こうの職員に何かを訪ねている様子。男性職員がフロアーの奥の方を指さしながらそれに応える。

明日香の背後で静子があたりを見回している。

×××

明日香と静子がカウンター越しに座っている後姿。頭上には、『医療精神保健福祉相談窓口』とある。

真田さつき(37) がコピーを数枚片手に
明日香と静子の前のカウンター越しに
座る。

さつき「・・・医者 of 診断を待たないとはっ
きりしたことは言えないのですが、様子を
お聞きすると統合失調症のようですね」

明日香と静子が神妙にうなづく。

さつき「当人は、自分の見ている世界が正し
いと思っっているので、病院に連れて行こう
として暴れることはよくあることです。成
人の入院には基本本人の承諾が必要です。
ただし専門家が、入院治療の必要性の判断
を下せば、『医療保護入院』という入院の
させ方もあります」

静子「娘は治療すれば治るんでしょうか」

さつき「投薬治療、カウンセリングなどで、
寛解状態に到達したケースをたくさん見て
きました」

静子「かんかい？」

明日香「症状が永続的に軽くなったり消失し

たりすることですよ」

さつき「ありがとうございます。その通りです。さすが先生ですね」

明日香が照れくさそうに首を振る。

静子「その、さつきのなんとか入院・・・というのをお願いしたいのですが・・・」

さつき「いずれにしても意志のある大人を、何であれ、強制的にさせるのは難しいことです。できれば、だます じゃないけど、病院であなたが必要とされているとか、ストーリーを作って、そこに乗っけてあげられるといいですね」

明日香が感心したようにうなづく。

さつき「病院にも相談のできるケースワーカーが常駐しています。うちも病院のケースワーカーとのつながりがありますので連絡しておきましょう。田中さんのお宅だと、緑黄病院が行き易いのではないでしょうか」

さつきがリストの緑黄病院の所にラインマーカーを引く。

用紙を紙袋に入れながらさつきが続ける。

さつき「お孫さんの担任の先生が付き添っていらしたのは、私の覚えている限り初めてです。田中さん、頼りになる先生でよかったですね」

静子が隣の明日香の方を向き、深々とお辞儀する。

○明日香の部屋（早朝）

明日香がベッドで眠っている。

窓から朝日が差し始めている。枕元の携帯の着信音が鳴る。明日香が目覚めて携帯を見る。そこに田中静子の名前が点滅している。

明日香「もしもし、何かありましたか！」

静子の声「聖子が徘徊して今警察から連絡がありました。先生、休日に申し訳ありません。私不安で・・・」

麻実の不安そうな「おばあちゃん」

という声が聞こえてくる。

明日香「わかりました。待っててください。
すぐそちらに向かいますから」

○ 派出所（朝）

大柄なおまわりさんがにこにこしながら、手を大きく振り、否定している様子。

静子「本当ですよ。おまわりさんがいなかったら、この娘はとつくのとうに車にはねられて死んでますよ」

おまわりさん「ご家族もたいへんでしょうが、気を付けてあげてくださいね。僕も引き続き見守る体制で行きますから」

静子がぼんやりした表情の聖子の手を取り、おまわりさんに深くお辞儀をする。その後ろで手をつないだ明日香と麻実もお辞儀をする、

○ 田中家ダイニング（朝）

田中聖子(42) が床に女の子座りをして茫然としている。時折覚醒したように、頭を斜めに傾ける。

ダイニングテーブルに座っている田中

静子(66)、田中麻実(10)、北原明日香

(29) の視線が聖子に集中している。

明日香「あのおまわりさん、優しかったですね。聖子さんへの対応の仕方がうまくてびっくりしました」

静子「お世話になったの4回目なんです。おまわりさんの従妹にあたる人が聖子と同じような感じだっておっしゃってました」

明日香「なるほど・・・」

静子「先生、本当にごめんなさいね。お休みの所・・・これからはご迷惑かけないようにしないと」

明日香が首を振る。

明日香「乗りかかった船です・・・」

静子「ありがとうございます。気をつけているんですが、小さな隙間をスルツと抜け出

るみたいに外に出ちゃうんです」

明日香「今まで大きな事故に遭わなくてよかったですよ・・本当に。」

明日香が聖子を見る。

明日香「聖子さん、どこか別の世界に行ってしまったように見えますね」

静子「あの状態になると長いんですよ・・数時間戻ってきません。話しかけても上の空です」

明日香「・・そうですか・・。あ、聖子さんの好きなことって何でしょう？若いとき夢中になったこととか・・得意だったこと。音楽でも映画でも趣味でも・・」

静子が視線を上向きにして考えている様子。

麻実「お母さんね、絵本読むの上手だったの。

麻実が幼稚園の時、いつもおふとんで読んでくれたのよ」

明日香「そう・・どんな絵本？今もある？」

麻実「『だるまちゃんとうさぎちゃん』とか

『ぐりとぐら』とか・・・うん今もある」

明日香「麻実ちゃん、ちよつと持ってきてくれる？」

麻実が席を立ち、二階に駆け上がる。

×××

聖子がテーブルの上で絵本を開いている。麻実が隣の席でそれを覗き込む。

明日香「・・・ぼくらのなまえはぐりとぐら。

この世で一番好きなのはお料理すること食べること。ぐりとぐらぐりとぐら・・・」

麻実が明日香の顔を見上げてにっこりとする。明日香も笑顔を返す。

その時聖子が突然背すじを伸ばしゆつくりと明日香たちの方に顔を向け口を開く。

聖子「どんぐりを・・・どんぐりをかごいっぱいひろったら、おさとうをたっぷりいれて煮ようね。くりをかごいっぱいひろったら、やわらかくゆでてクリームにしようね」

麻実が目をまん丸くする。

麻実「お母さん・・・」

聖子がのっそりと起き上がり、明日香たちの方へ近づいてくる。明日香が席を立ち、聖子はその席に座る。

聖子が絵本を右手でさすり、一息ついて読み始める。

×××

聖子「・・・あとに残ったのは、からっぽの大きいお鍋と、あのとつても大きい卵のからだけでした。さあ、この殻でぐりとぐらは何をつくったと思いますか？」

麻実の表情がぱっと明るくなる。

麻実「車！卵の殻の車！」

聖子が絵本のページをめくる。

そこにはハンドルと車輪のついた卵の殻半分にぐりとぐらが乗ってハンドルはぐりが握り、その後ろに連結された半分の殻に荷物が乗っている見開きの大きな絵が現れる。

聖子が麻実にっこり笑う。

聖子「大正解」

麻実が嬉しそうに聖子の腕に自分の腕をからみつけて頭を肩にゆだねる。

明日香がその様子を嬉しそうに見ているが、何かに気がついたように「あっ」と言う。

明日香「あの・聖子さん。絵本を読んでくださる人を探しているんです。お医者さんがいてね、その人が探してるんです。絵本のお話もしたいって……。一緒に病院に行ってくださいませんか？」

聖子「何かを考えている様子。」

聖子「絵本・絵本はぐりとぐらでいいのかしら？」

明日香「ええ、ぐりとぐらがいいと思います」

聖子「いいわよ」

明日香「じゃ、日にちが決まったら連絡します」

明日香が静子の方を見る。静子がゆっくりと頭を下げる。

○ 明星小学校職員室（夕）

明日香が机で仕事をしている様子。
腕時計を見た後、窓側に移動する。
窓の外を見ている明日香の後姿。

○ 明星小学校職員室からの窓の景色（夕）

あでやかな夕焼け空。
ウサギ小屋の中に人影が動いている。

○ 明星小学校校庭・ウサギ小屋（夕）

麻実が掃除の行き届いたウサギ小屋で、
餌の補充をしている。ウサギ小屋の前
の木の枝には何もかかってない。（ラ
ンドセルはかかってない）

○ 明星小学校廊下（夕）

明日香が早足で歩いている。
4年3組の教室の前で止まり、引き戸
のガラス小窓から教室内を覗く。

○ 明星小学校 4 年 3 組 教室 内（夕）

ランドセルを背負った女の子の後姿が見える。机の上にある別のランドセルの蓋をあけ、中を探っている様子。

筆箱を取り出し、ランドセルの蓋をして、そこから離れようとする。

その時引き戸が開き、明日香が現れる。

三橋里佳子(10) が振り返り、素早く筆箱を自分の背後に隠す。

明日香 「それ・・・田中さんの筆箱だよね・・・」

里佳子が下を向いて押し黙っている。

明日香 「黙ってないで何か言って、三橋さん」
里佳子が明日香を見る。

里佳子 「麻実ちゃん笑ってるの。何しても怒らないの・・・ウサギ当番押し付けても、お母さんの悪口言っても・・・」

明日香 「怒らないからって何をしてもいいってことじゃないでしょ？自分が悪いことしてるってわかってるよね？」

里佳子が下を向いてうなづく。

里佳子「・・・先生言ってたみたいにあたし、むしやくしやしてるのかもしれない・・・」

明日香「そう・・・じゃ三橋さんはどうしてむしやくしやするんだと思う？」

里佳子「先生、あたしね、ピアノも習字も塾も本当は嫌いな。ママはいつも怒ってて。ママね、麻実ちゃんのお母さんは頭おかしいから、麻実ちゃんと遊んじやいけないって・・・」

里佳子がしょんぼりして下を向く。

明日香「本当は遊びたいのね、麻実ちゃんと」

里佳子がうなづく。

里佳子「ピアノに間に合わないから麻実ちゃんにウサギ当番代わってもらったの・・・」

明日香がうなづく。

里佳子「でもピアノ行きたくなくて教室に残ってたの。そしたら麻実ちゃんのランドセがあった。あたしなの、麻実ちゃんのランドセル・・・」

里佳子が下を向く。

明日香「三橋さん、正直に言ってくれてありがとう。だけどこんなこと繰り返して三橋さんは楽しいの？」

里佳子が首を振る。

里佳子「楽しくない。でもほんの少しだけむしろしゃくしゃくが消える気がしたの。なんかすーっとするようなの……」

明日香「なら先生ともっと違うやり方探そう・・田中さんのランドセル持って・・」

里佳子が筆箱をランドセルに戻し、片手でそれを抱える。

○明星小学校校庭ウサギ小屋近辺（夕）

明日香と里佳子がウサギ小屋の外側に立つ。

明日香「田中さん、ランドセル置きっぱなしだったよ」

小屋の中でうさぎと遊んでいる麻実が顔をあげ、明日香と里佳子を見る。

麻実「あれ、里佳ちゃん、どうしたの？」

里佳子「麻実ちゃんごめんね。ランドセル
やったのあたしなの。もうしないから」

麻実がウサギ小屋から金網越しに里佳
子を見つと見る。

麻実「里佳ちゃんは私が嫌いなの？だからそ
んなことしたの？」

里佳子が大きく首を振る。

里佳子「違う・私むしゃくしゃしてて。な
んでそんなことしたのか自分でもよくわか
らないの」

麻実がにっこり笑う。

麻実「わかった・もうしないならいいよ。
許してあげる。ねえ里佳ちゃんもウサギな
であげて。触るとかわいくて本当に気持
ちいいよ」

里佳子がほっとしたように明日香を見
上げる。明日香がほほ笑む。

○ 明星小学校 3年 4組 教室（朝）

クラスの生徒たちが爆笑している。

佐久間智也⁽¹⁰⁾ がクラスの前に立ち、
照れくさそうに頭を掻いている。

智也「特に肉まんが効くんだなあ。肉まん最
高って感じで・・・一口ごとに俺の中に優
しさが芽生えるっていうの？・・・」

クラス全体が再び笑う。

明日香「佐久間君らしいな・・・でもおなか空
いている時に人の倍イライラするってのは
だめよ」

智也が頭を掻きながら席に戻る。

明日香「じゃ三橋さん、次お願い。三橋さん
の、自分を穏やかに保つ方法は何？」

里佳子がクラスの前に立つ。

里佳子「私は・・・ずっと動物は怖いと思って
ました。でもこの前ウサギを初めて手の上
にのつけてなでてみました。うさぎはあつ
たかくてやわらかくてとても優しかったで
す。餌もあげてみました。私のあげた餌を
おいしそうに食べてくれました。その時思

いました。こういうのが穏やかな気持ちっ
ていうのかなって」

クラスがシーンとして聞いている。

○明星小学校職員室（夕）

明日香が机で仕事をしている。そこに

角田三郎(40) が現れる。

角田「北原先生、校長先生がお呼びです」

明日香「あ、角田先生、ありがとうございます
す」

明日香が「何だろう？」というような
表情をする。

角田「思い当たること、なし・・・ですか？」

明日香「・・・ええ・・・ま、行ってみます。す
みません」

明日香が机の上の物を片付ける。

○明星小学校校長室（夕）

作田秀人(58) と明日香が向かい合って
ソファ―に座っている。

作田「・・・そういうわけで、一人の生徒に特別な時間を割くというのは考え物ですよ、北原先生」

明日香がまっすぐ作田を見る。

明日香「クレームはどちらから上がったんですか？」

作田「それは言えませんよ。そういうお約束ですし・・・」

明日香「どうして私が田中さんのお宅を訪問しているのかきちんと説明できますし、他のご父兄にも分かってもらえると思います」

作田がゆっくりと首を横に振る。

作田「若いですね・・・北原先生。そんな甘いもんじゃないですよ。言葉通じないんですから。同じ日本語しゃべってるのに。モニター親子は確実に毎年増えてるんです」

明日香「だからって、文句の多いご父兄のご機嫌取りはできません。必要なことは必要なことですから・・・。それに私のできることなんてとても限られています」

作田が黙って明日香の話の話を聞いている。
明日香「私が直接何かをしてあげられることなんてほとんどありません。私がしていることは橋渡しの役割です。それでも生徒が困っていたら手をさしのべる・・これは私の、教師としての基本です」

作田が鼻から深い溜息をつく。

作田「わかりました。私からきちんと説明しておきましょう。ただし経過は私にその都度知らせてくださいね」

明日香「はい。ありがとうございます」

明日香が頭を下げる。

○ 駒田病院（朝）

3か月後

ナースがひとつひとつの病室に顔を出し、はつきりとした声で伝える。

ナース「聖子さんの絵本の時間ですよ。みなさん、談話室にいらしてね」

それぞれの部屋からぞろぞろと入院患

者らしき人たちが談話室の方へ向かう。

×××

パジャマを着ている聖子が、椅子に座った大勢の人たちの前で絵本を読み聞かせている。聖子の表情ははつらつとしている。

○明星小学校校長室（夕）

作田がにこにこしている。

その向かいのソファーに静子が麻実と座っている。

作田「・・・そうですか、本当に良かったです

ね。田中さん、よかったね」

作田が麻実に視線を向ける。

麻実「お母さんね、毎日病院で絵本読んで暮らしてるの。前のお母さんに戻ったみたい」
その時ドアが開き、明日香が入ってくる。静子が立ち上がりお辞儀する。

×××

静子が作田と明日香を前に話している。

静子「薬が合ったみたいなんです。快方に向かっています。お医者さんもあと一か月ほどで退院を考えましょうって言ってくださいました」

作田と明日香が笑顔でうなづく。

静子「北原先生には感謝しても感謝しきれません。私たち家族3人の命を救ってくださいました」

明日香「そんな風に言ってもらうと困ってしまいますが・・・私はすべきことをしたまでですから」

作田が二人のやり取りを神妙な表情で聞き、何度か深くうなづく。

麻実「先生、あのね、家でもうさぎ飼うのよ。ベッドでお母さんと話した時ね、そんなに好きならうさぎ飼いましょう、って。お母さんが」

麻実がにっこりする。

明日香「よかったね」

明日香が麻実を優しいまなざしで見つ

めながら、うなづく。

課題 医者

「単純」という処方箋

藤田千恵子

人物

木下	鹿島	龍村	福山	北原	田中	田中	田中
ほたる	太一	久人	哲志	明日香	聖子	麻実	静子
(39)	(33)	(47)	(29)	(42)	(10)	(66)	
精神科医	木下の同僚	バーのマスター	バーの常連	小学校教師	木下の患者	聖子の娘	聖子の母親

○ バー・ジャスミン（夜）

薄暗い店内。アンティーク調の落ち着いた雰囲気の中でオールドジャズが音量控えめに流れている。

カウンターの奥で、黒ベストと蝶タイにロングソムリエエプロンを粋に着こなした龍村寿人(33)がグラスを磨いている。カウンター席に座っている福山哲志(47)が寿人に目配せして二つ向こうの席に突っ伏している木下ほたる(37)に注意を向けさせる。龍村が木下に近づき、肩を優しくたたく。

龍村 「木下先生、飲み過ぎですよ」

木下が顔をあげ、気分の悪そうな表情の後、グラスを差し出す。

木下 「じゃもう一杯だけ・頼むよ・」

龍村が「しょうがないな・」というような表情でグラスを受け取る。

×××

扉が開いて龍村が入ってくる。

福山が振り返る。

龍村「福ちゃん、悪かったね。何とかタクシ
ーに押し込んだよ」

龍村がやれやれというような表情でカ
ウンターに入る。

福山「お医者さんだって言ってたよね。悪い
けど俺、あの人に診てもらいたくないな」

龍村「案外仕事はちゃんとしてんのかもよ」

福山「何科なんだろう？」

龍村「精神科だってさ・・・」

福山「それはそれは・・・」

龍村「それはそれはって、何が？」

福山「精神科医の2割だったかな・・・3割か
なあ。かなりの確率で心を病んでるって何

かで読んだ」

龍村「そうなんだ・・・」

龍村がグラスを拭きながらドアのほう
に目をやる。

○大成病院・診察室（夕）

木下が白衣を着て椅子に座っている。

向かい合わせでやはり白衣を着た鹿島
太一(39) が木下の話を聞きながらうな
づいている。

木下「ずっと診てる患者はいいんだけど、新
患が怖くてね。動機と冷や汗が始まって、
夜寝れなくなってる」

鹿島がカルテに書き込みながら、時折
手を止めて木下を見る。

木下「当直がヤダ。面倒だ。最近どの患者も
同じ顔に見えるんだよ。いい反応だなと思
ってたら自殺されるだろ？俺今まで何やっ
てたのかって・・・朝起きたら体が動かな
いんだ」

鹿島が手を止める。

鹿島「やっぱり薬飲んだほうがいいだろう。

典型的だよね」

木下「わかってるって・・・」

鹿島「精神科医だって生身の人間だ。俺たち
の心はゴミ箱じゃないんだから・・・」

鹿島が木下から目をそらし、カルテに書き込みをする。その姿を木下が神妙な表情で見ている。

○大成病院・診察室前・待合席（夕）

待合席に田中聖子(42)を真ん中に田中

静子(66)と田中麻実(10)が座っている。

聖子が絵本を片手に立ち上がり、怯えた表情であたりを見回す。

麻実「お母さん大丈夫だって。その人、ゴジラが食べちゃったって明日香先生言ってたでしょ？だからもう追ってこないよ」

聖子「そう？そうだわ。そうだった：」

聖子がほっとしたように座りなおす。

麻実が笑顔で立ちあがり手を振る。

麻実「明日香先生、ここここ・・・」

北原明日香(29)が早歩きで、エントランスから近づいてくる。

明日香「職員会議が長引いてしまって。診察これからですか？」

静子「先生、お忙しいのにありがとうございます
ます」

静子が立ち上がり深々とお辞儀をする。

静子「次の次くらいに呼ばれると思います」

明日香「じゃ私、絵本の読み聞かせのこと、

先生に先にご説明しますね。聖子さん、絵
本読んであげてね。先生に」

聖子がうなづく。麻実が明日香にこりとする。

○大成病院・診察室（夕）

木下が椅子の背もたれにもたれて、考
えるような表情をする。向かい合わせ
で明日香が座っている

木下「・・・お話はだいたいわかりましたが・
・・・なぜ娘さんの学校の先生がいらっし
やっただんでしょう・・・」

明日香が飾り気のないトーンで答える。

明日香「生徒が困ってたから手を差し伸べた
だけですけど・・・」

木下がぼかんとする。

明日香「それでですね・・入院が必要ななら
聖子さんに、あ、先生がこれから診察なさ
る患者さんです・・聖子さんに絵本を読む
お仕事を依頼していただきたいんです」

木下が明日香をじつと見る。

木下「あなた、なかなか興味深い人ですね」

明日香「え？それは精神科的にですか？一般的
にですか？」

木下がククツと笑う。

木下「オーラが明るいですよ。心を病んで
いる人たちには何よりも人のおおらかさが
救いになるんです。僕も実際癒されるなあ」

明日香「先生、医者の不養生、紺屋の白袴に
ならないでくださいよ」

木下がいたずらっぽい目で明日香を見
る。

木下「もうなってるけどね・・」

明日香「えっ？」

木下が苦笑いをする。

XXX

木下が聖子の話を聞いている。

聖子の後方に明日香が立っている。

木下「じゃその男はあなたを殺そうと追いかけてくるんだね」

聖子「はい、けん銃やらナイフやらベストの裏に隠し持って。あ、でもねゴジラが食べちゃったからもう大丈夫だったんだわ」

木下がきよんとする。

木下「え？ゴジラが？」

聖子がうなづき、振り返って明日香を指さす。

聖子「この人が・明日香先生が見たって」

明日香が焦って、

明日香「そうなんですよ先生。ゴジラがね、ゴジラがやってきて、そいつを丸ごと食べちゃったんです。だからもう平気です。ゴジラもそのあと故郷に帰っていきました」

木下が明日香をちらりと見る。

木下「ほほー・なるほど・ゴジラがね」

明日香が動揺を隠そうとしている様子。

木下「わかりました。では聖子さんに絵本を病院で読んでもらいたいと思います。ひとつ、短いのを僕のために今読んでくれますか？」

聖子がトートバッグから一冊の絵本を取り出し、開く。たくさんの子供たちが原っぱで無邪気に遊んでいる様子が開いたページに描かれている。

聖子「はらっぱはいいな はしっても すわっても ねころがっても いいな そらをとぶひと このゆびとまれ ひらひら ひらひら おまじない ちようちよにな あれ かぜ かぜ おねがい チチンパイ」
木下が吸い込まれるように聖子の読み聞かせを聞いている。

XXX

聖子が絵本の最後のページを読んでい

る。
聖子「ふくれた ふくれた ゆきだるま ふ

わふわ　そらへ　とんでいき　みんな　く
もに　なっちやった」

聖子が満足げに絵本を閉じる。

木下がぼーっとしている。その目には
うっすら涙がにじんでいる。

明日香「素敵でしょ？聖子さんの読み聞かせ」

木下がうんうんとうなづく。

○バー・ジャスミン（夜）

龍村がカウンター奥で玉ねぎを極薄に
スライスしている。

カウンター席に木下と鹿島が隣同士で
座ってグラスを傾けている。

木下「精神医学の知識なんて何の役にもた
なかつたよ、いざ自分がなってみると」

鹿島「じゃ何？何がお前を回復させた？」

木下「まずは安全レベルまで引き上げてくれ
たのはやはり薬のお陰だけれど・・・」

鹿島「おかげだけれど？」

木下「その人といると、何もそんなにむつか

しく考えないでいいんじゃないかと思えるんだ」

鹿島「その人って誰だよ。女か？」

木下が照れくさそうにうなづく。

○大成病院・談話室（朝）

談話室にたくさんの人たち。

入口に木下と明日香が立っている。

明日香「日曜日のご家族もたくさんいらっしやるから聖子さん大盛況だわ・・・」

席の前方に座っている麻実が明日香に手を振り、明日香が振り返す。

木下「絵本なんて、ずっと存在すら忘れてたけど、子供の頃の気持ちか蘇るんだよなあ」

明日香「単純なものって忘れ去られやすいけど、実はけっこうその単純さに救われたりして・・・ね」

木下「僕もあなたの単純さに心底救われています」

明日香が笑いながら木下を小突く。